



イラスト：永田信行

Contents

- 今年度をもって沿岸域変化状況等調査が完了します！……………P 1
- 植生調査データベースが公開されました！
- モニタリングサイト 1000 第3期とりまとめが本格始動！………P 2
- 足環をつけた鳥を見たらご連絡ください！
- 浅海域生態系現況把握調査（サンゴ礁分布調査）を始めます！
- 「いきものログ」の便利なアプリのご紹介……………p 3
- モニタリングサイト 1000 ニュースレター……………P 4～P 7
- 中米諸国の環境大臣らの生物多様性センター訪問……………P 8
- 国際協力：東・東南アジアの国々へ向けた生物種の識別研修
- インターネット自然研究所のご案内……………P 9
- 生物多様性センターの企画展示と今年度の自然体験プログラム
- 標本紹介 第27回……………P10

表紙のイラスト

日本各地の生物多様性を1枚の絵巻にして表現した「つながりんぐ」から一部を抜粋しました。本州で見られる様々な生きものが描かれており、生きものたちのつながりが表現されています。絵巻全体は生物多様性センターの展示室（つながりうむ）でご覧いただけます。

環境省 自然環境局
生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan



●今年度をもって沿岸域変化状況等調査が完了します！

みなさん、普段見ている海岸の中には、わずかに数十年の間に大きく変化している場所もあることをご存じですか？

生物多様性センターでは、汀線（海岸線）の変化状況を量的及び質的に把握することを目的として、第2回自然環境保全基礎調査海域調査で選定された延長100m以上の自然・半自然海岸の砂浜・泥浜を対象に、平成22(2010)年度から沿岸域変化状況等調査業務を開始しました。

汀線変化を把握するために行われる海浜変形調査は、従来、汀線のみに着目した「線的な把握」が一般的でした。しかしながら、汀線変化は砂浜や植生、防波堤等の海岸構造物の建設と相関があることから、線的ではなく「面的な把握」が沿岸域の管理を行う上でも望ましいとされています。

本調査では空中写真等を用いて、過去（1970年代）と現在（2000年代）の汀線の位置や形状を比較するとともに、対象海岸の砂浜や砂丘植生・海岸林等の植生といった後背地の面積算出や変化量の解析により、海浜変形を浸食の原因や埋立てなどの5つのタイプに分類しています。

大規模かつ長大な砂浜・泥浜を有するオホーツク海沿岸や瀬戸内海等を対象として調査を開始し、昨年度末で対象海岸全体（約8,105km）の約94%が終了しました。調査結果から、全国的に砂浜の浸食は少しずつ進んでおり、特に鳥取県と宮崎県で顕著であったことがわかりました。また、岩手県では漁港等の建設による埋め立てが30年で大幅に増加したこともわかりました。

今年度は鹿児島県の調査を実施しており、今年度末には対象海岸すべての調査が完了する予定です。

沿岸域調査の成果は以下のウェブサイトより閲覧・ダウンロードできます。海岸という身近な存在に親しみを感じていただくとともに、海岸管理や防災管理等に幅広くご活用ください！



九州における調査状況（平成28年度末時点）

■自然環境調査 Web-GIS

<http://gis.biodic.go.jp/webgis/>



■沿岸域変化状況等調査

<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-027.html>



●植生調査データベースが公開されました！

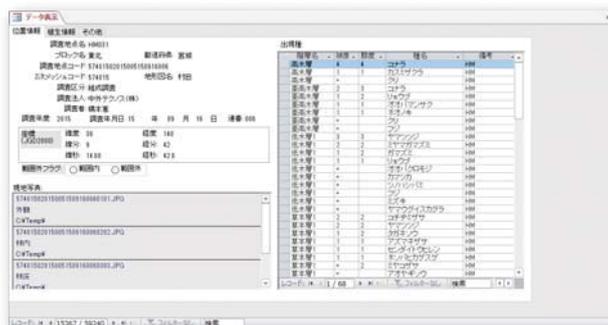
生物多様性センターでは、植物のまとまりを植物群落として区分し、それらの面的な分布状況を図化した植生図の整備を行っています。植生図の整備にあたって、植生構造や地域の典型的な群落を決定する出現種把握のため、現地での組成調査は不可欠であり、得られたデータは植生図作成のみならず、環境アセスメントや地球温暖化対策、動物の生態調査等での活用も期待されます。

現地調査のデータは平成12年度から現在までデータベースとして蓄積されており、データ数は59,240件に及んでいます。以前は利用にあたって申請が必要でしたが、今年6月より当センターのウェブサイトから申請不要でダウンロードできるようになりました！

ぜひ、みなさんも植生調査データベースをご活用ください。

■植生調査データベース

<http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-006.html>



植生調査データベース

●モニタリングサイト1000 第3期とりまとめが本格始動!

モニタリングサイト1000は、研究者や市民の方々の協力を得つつ、全国に設置した約1,000か所の定点で様々な生態系を継続的に調査し、その結果を自然環境の保全に活かそうという取り組みです。調査結果は毎年公表し、多くの方に活用していただいています。また、この取り組みでは、5年を1期として区切り、それまでに得られたデータを基にして、生態系の状況や変化等を詳しく把握・評価するための「とりまとめ」を行っています。今年度は第3期(平成25年度から29年度)の最終年に当たり、平成30年度中の「第3期とりまとめ」に向け、データの解析に着手するなど本格的な作業を進めています。

今回のとりまとめの対象となるデータは、現地調査で得られた様々な生物の生息・生育状況、水温や地温の測定値など15年分で、その総数はなんと200万件以上になります。この膨大なデータを整理・分析・考察した結果をわかりやすくみなさまにお伝えできるよう各生態系担当者で知恵を絞っています。例えば、サンゴ礁生態系では、平成28年度に大規模なサンゴの白化現象が起きたことを受け、各地点のサンゴ礁の健康診断を盛り込んだとりまとめを行う予定です。

とりまとめの結果は、下記のウェブサイトで公開する予定です。これまでの報告書なども掲載中ですので、ぜひご覧ください。



■モニタリングサイト1000 報告書

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/>



●足環をつけた鳥を見たらご連絡ください!

野鳥に個体識別用の数字が刻まれた金属製の足環を付けて生態などを調べる「鳥類標識調査(バンディング)」を行っています。足環を付けた野鳥の再捕獲や観察によって足環の番号を読み取ることができれば、その個体が何年生きているか、どこに移動したかといった貴重な生態情報がわかります。過去には、12,800kmもの長距離を移動した例もあります。

足環付きの野鳥を見かけ、番号の情報を確認することができた場合は、下記連絡先までご連絡をお願いします。ご連絡いただいた方には、その野鳥のこれまでの経路情報をお知らせし、記念ステッカーをお送りします。なお、色つきの足環は色のみの情報でも個体を特定できるケースもあります。例えば、写真のクロツラヘラサギは、左足の2色の足環の色または右足の足環の数字で個体識別ができます。クロツラヘラサギは、ロシアで足環が付けられ日本で確認された例がありますので、足環の色のみの情報もぜひご連絡ください。

【連絡先】山階鳥類研究所鳥類標識センター ☎04-7182-1107

■鳥類標識調査 <http://www.biodic.go.jp/banding/index.html>



鳥類に合わせた様々なタイプの足環



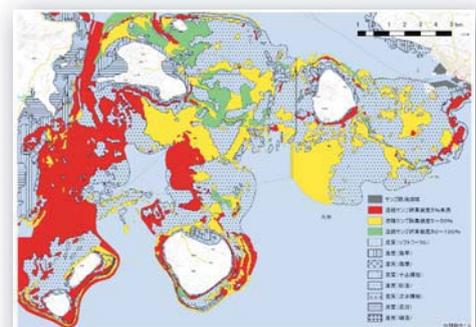
足環を装着したクロツラヘラサギ
(山階鳥類研究所提供)

●浅海域生態系現況把握調査(サンゴ礁分布調査)を始めます!

今年度より5か年の予定で、リモートセンシング技術及びモニタリングサイト1000によるデータを活用しながら、国内の主要なサンゴ礁の分布図を作成し、順次公表していきます。

サンゴは気候変動による影響を受けやすく、昨年度は大規模な白化現象が起きましたが、次第に劣化や分布の変化・減少が進むことが危惧されており、現状の把握や影響の評価を進めていくことが重要です。本調査では現在の分布状況だけでなく、第4、5回自然環境保全基礎調査の調査結果との比較から、分布面積やサンゴ被度の変化などについても整理し、国内のサンゴ礁が置かれている状況をより明らかにしていきます。

今年度は沖縄県(石垣島、西表島等の周辺海域及び石西礁湖を予定)から調査を開始しますので、どうぞご期待ください。



サンゴ礁分布図のイメージ(石西礁湖周辺)
(第4回自然環境保全基礎調査サンゴ群集分布図)

●電波が届かないところでも使える! 「いきものログ」の便利なアプリのご紹介

インターネット上で生物多様性情報を収集・共有するウェブサイト「いきものログ」は、生きものについて知りたい人はだれでも利用でき、ユーザ登録をすれば、生きものの観察情報を報告できます。「いきものログ」には約3,330の登録ユーザから報告された450万件以上の生きものの観察情報が登録されており、それらの情報は、生物名や場所から検索できるほか、分布図の表示やGISソフトで表示可能な形式でのデータのダウンロードができます。ユーザは自分が投稿した情報をマイページで確認したり、団体を登録すればオリジナルの調査を企画することも可能です。

生きものの観察情報は、インターネットに接続可能なパソコンはもちろん、「いきものログ」専用アプリを利用することで、スマートフォンやタブレット端末からも簡単に報告できます。アプリを使えば、GPS機能付きの端末で撮影された写真から撮影場所の位置情報(緯度経度)を読み取って、生きものの観察場所を正確に記録することもできます。あらかじめ調査対象地域の地図をダウンロードしておけば、電波が届かない場所でも、調査場所の地図を表示して、見つけた生きものの情報を端末の中に一時的に保存しておき、調査終了後に「いきものログ」に報告することができます。

みなさんも身近な地域や旅先で見つけた生きものの情報を「いきものログ」に報告してみませんか?



「いきものログ」アプリはアンドロイド版とiOS版があります。それぞれのストアから無料でダウンロードできます。



アプリからの報告方法

ログインします。 「写真を撮って報告する」をタップします。 写真を撮り「写真使用」をタップします。 和名を入力します。 「確認した数」を入力または「ありなし」をタップします。 「一覧 / アップロード」をタップします。

地図をダウンロードしてみよう

「アップロードをする」をタップします。 アップロードしたい報告にチェックを入れ、「実行する」をタップします。 「調査に参加する」をタップします。 参加する調査を選んでください。 「地図を見る」をタップします。 「地図をダウンロードする」をタップして、範囲を指定してダウンロード!

1. 高山帯

高山帯の気温

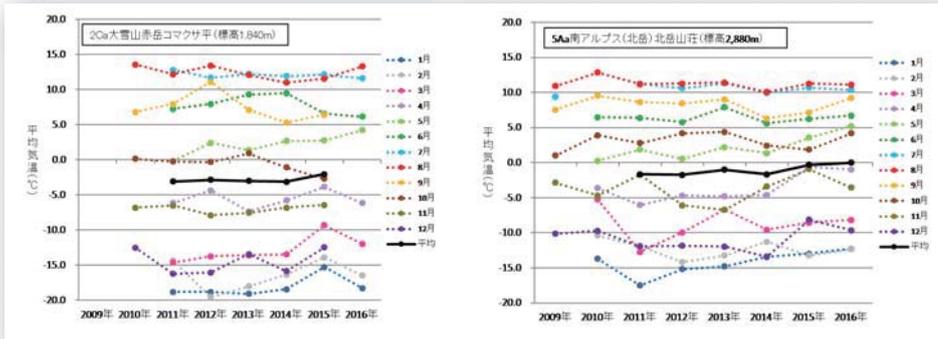
一般財団法人 自然環境研究センター 小出 可能

高山帯調査では、大雪山、北アルプス（立山、常念岳）、白山、南アルプス（北岳）、富士山（森林限界付近）で、1時間おきに気温を測定しています。

大雪山と南アルプスの例をみると、どちらのサイトとも年平均気温は0℃以下、真夏の7～8月でも月平均気温は10℃を超える程度で、真冬の1～2月は-15℃前後となり、大雪山では-20℃近くにもなります。

2016年はどちらのサイトともに、5月の月平均気温はそれまでで最も高くなりましたが、1～4月と6月の月平均気温は、大雪山では2015年より低かったのに対し、南アルプスでは2015年と同じかやや高くなり、地域によって経年変化に違いがあることがわかりました。

一般的な目安として、植物が生長できる温度は5℃以上、昆虫類が活動できる温度は10℃以上とされているので、月平均気温からみると、植物が生長できるのは6～9月の4か月間、昆虫が活動できるのは7～8月の2か月間でした。



大雪山と南アルプス（北岳）の平均気温

2. 森林・草原

海外からも関心が寄せられています

一般財団法人 自然環境研究センター 日野 貴文

森林・草原調査のネットワークセンターがある北海道大学苫小牧研究林は、長期生態学研究（LTER）の拠点施設として広く知られ、毎年国内外から多くの研究者や行政関係者が視察に訪れます。ネットワークセンターでは、これらの訪問者にモニタリングサイト1000の取組みを紹介しています。

今年の7月に、国際協力機構（JICA）の研修プログラムによる視察がありました。アジア・アフリカ・オセアニアの各国で環境行政等に携わっている研修員に対して、モニタリングサイト1000の調査体制や得られた成果を紹介し、現地での調査区の見学と調査方法を学ぶ実習を行いました。研修員からは、「統一した調査方法でモニタリングが行われ、そのデータが公開されていることに強い興味を持った」との感想をいただきました。この研修以外にも今年度は、フィリピン大学、北東アジア地域森林LTERワークショップの方々による視察もありました。そのほか、苫小牧市小中学校理科教員の方々の見学もありました。このような活動を通してモニタリングサイト1000の取組みが、国内外の生態系保全に活かされると期待しています。



ピットフォールトラップ（甲虫調査）を見学する参加者



3. 陸生鳥類

今年の留鳥の繁殖はちょっと遅め ～鳥の繁殖時期のモニタリング～

NPO 法人 バードリサーチ 植田 睦之



巣箱で孵ったヤマガラのヒナたち

陸生鳥類調査では、各地のモニタリングサイトで鳥の生息数の変化を記録していますが、それだけでなく、一部の調査地では鳥の繁殖時期のモニタリングもしています。調査は2つの方法で行っていて、ひとつは調査地にICレコーダーを設置して、毎朝の鳥のさえずりをタイマー録音し、夏鳥の渡来時期や留鳥の繁殖時期を推測する方法、もうひとつは温度記録計の入った巣箱を設置して、巣箱を利用するヤマガラの繁殖時期を測定する方法です。左写真のようにヒナが孵るとヒナの体温で巣箱内の温度が高くなり、ヒナが巣箱から巣立っていくと、巣箱内の温度は外気温と変わらなくなります。こうした巣箱内外の温度差を見ることで、ヤマガラの繁殖時期がわかります。これまでの調査結果から、今年は春先が寒かったためか、ヤマガラの繁殖が例年よりもやや遅かったことがわかりました。また、早い時期に繁殖をするヒガラやゴジュウカラなどの留鳥もさえずりが活発になる時期がやや遅く、これらの種も繁殖が遅かったものと思われます。それにより鳥の繁殖への気候変動の影響を明らかにすることを目指しています。

4. 里地

市民が主役の全国調査 10年間の調査結果と各地の保全の動き

公益財団法人 日本自然保護協会 後藤 なな

里地調査は、全国約200か所の里山で地域の市民が中心となって調査を実施しており、自ら成果を活用し保全につなげています。例えば、埼玉県和光市では、里地調査をはじめ地元調査団体が精力的に実施してきた調査活動を通じて、その場所の重要性が広く認識され、市の保護地域への指定が実現しました。また、熊本県熊本市では市内の調査サイトと地元自治体が協力し、生物多様性地域戦略のもと、シンポジウムを開催したほか、地元調査団体が講師となって地域住民がアカガエル類調査の手法を学ぶ学習会が開催されました。

サイトごとの成果活用が進む一方で、全国調査の結果からはノウサギやウグイス、ホタルなど里山の“普通種”とされてきた生物の減少傾向が明らかとなってきました。社会構造の変化に伴う里山の土地利用の変化など複合的な背景要因がある中、全国への現状の発信と国レベルの施策への活用を進めるとともに、各地の優良事例を共有しサイトレベルでの保全の取組みを盛り上げていく必要があります。



白子湧水群における水環境調査の様子
(提供：NPO 法人和光・緑と湧き水の会)

5. 陸水域

湿原調査に八幡平サイトが加わりました

NPO 法人 日本国際湿地保全連合 井藤 大樹



八幡沼周辺の湿原で永久方形区を設置する様子
調査ラインの起点(写真右)と終点に目印を立て、
方形区を設置しています(撮影者：加藤 将)

2009年から始まった陸水域調査のうち、湿原調査では、日本各地に設定された調査サイトにて湿原植生調査を中心としたモニタリングを進めています。2016年には新たなサイトとして八幡平サイトが加わりました。

岩手県と秋田県にまたがる奥羽山脈北部の八幡平付近には、湿原群が点在しています。この湿原群のうち、岩手県八幡平市の標高1,400m～1,600mに位置する八幡沼周辺の湿原と黒谷池湿原の2か所を調査地として選定しました。それぞれの湿原で調査ラインを引き、ライン上に永久方形区を設置して植生調査を実施しました。調査の結果、岩手県のレッドリストで絶滅危惧種に選定されているホロムイソウやキンコウカ、タテヤマリンドウなどの希少な植物が確認された一方で、特定外来生物の侵入は確認されませんでした。また、2016年の調査の時点では、本サイトにニホンジカの侵入は確認され

ておらず、植生への食害は認められていません。しかし、近隣の地域で過去にニホンジカの目撃情報があり、今後の積雪量の減少や行動域の拡大によりニホンジカの侵入が懸念されることから、継続的に監視を続けていく必要があります。

6. ガンカモ類 オオバンが全国で増加中

NPO 法人 バードリサーチ 神山 和夫



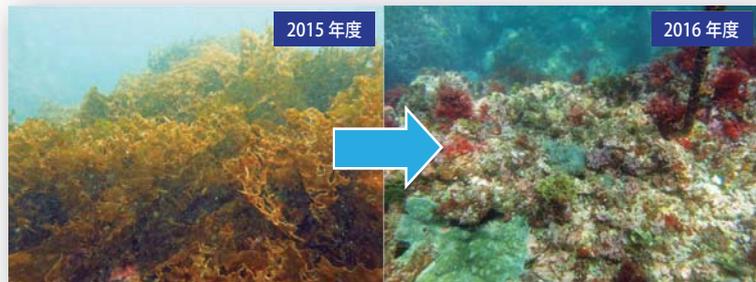
オオバン

オオバンは体全体がまっ黒でくちばしと額が白い水鳥です。カモに似ていますが、カモの水かきは足の指の間が膜でつながった構造をしているのに対して、オオバンの水かきは指の両側が平たく広がった構造をしています。このオオバンが全国的に越冬数を増やしているようなのですが、そのことを確かめるため、青森県以南のオオバンが100羽以上記録されたことのあるサイトで、個体数が安定する12月から翌年1月の最大値の年平均を、モニタリングサイト1000がスタートした2004年から2010年の冬までと、2011年以降と比較してみました。すると、16サイト中8サイトで有意な増加がみられました。中でも、最大の生息地である琵琶湖では2004年の冬に13,743羽だったのが、最も多かった2014年の冬には82,928羽にまで増えていました。オオバンが増加している調査地が国内の特定の地域に多いという傾向はみられませんが、湖沼内の環境によって増減に違いがあるか調べる必要があります。

7. 沿岸域 激減した薩摩長島サイトのアントクメ

NPO 法人 日本国際湿地保全連合 山下 友実

沿岸域では磯・干潟・アマモ場・藻場の4生態系を対象に、2008年度より調査を実施しています。このうち藻場では、北海道から九州までの6か所に調査サイトを設置し、毎年同じ場所で海藻の種数や被度を調査しています。調査サイトのひとつである薩摩長島サイトは、鹿児島県長島町の西岸に位置し、東シナ海に面しています。本サイトはカジメ科の海藻であるアントクメが優占する藻場で、これまでの調査で、本サイトのアントクメの被度は年変動が大きいことが分かっていますが、2016年度の調査で



薩摩長島サイトの様子：2015年度（左写真）ではアントクメ群落が見られたが、2016年度（右写真）では激減していました（撮影者：寺田 竜太）

はアントクメが激減している様子が確認されました。わずかに残っていたアントクメの体の一部には魚類による食痕が確認され、食害の影響を受けた可能性が考えられます。一方、同じ長島町でも、反対の東岸の八代海に面する藻場では例年通りアントクメの生育が確認されたとの報告がありました。薩摩長島サイトにおけるアントクメ被度の変動要因は明らかになっていませんが、今後もモニタリング調査を継続し、本サイトの植生状況を注視していく必要があります。

8. シギ・チドリ類 湿地のモニタリングを続けるために

NPO 法人 バードリサーチ 守屋 年史

シギ・チドリ類のカウント調査に限らず、長期間のモニタリングを続けるためには、調査員の確保が必要となります。シギ・チドリ類調査は、主にボランティアによる調査で成り立っている市民調査ですが、毎年複数回の調査を継続していくことは大変なことです。モニタリングサイト1000の前身の調査から参加している調査員の中には、40年以上参加しているベテランもいますが、近年は様々な理由により継続が困難な事例も出てきました。

シギ・チドリ類は一部の種では形態が非常に類似しており、一朝一夕に調査技術を得ることが難しいため新たな調査員をすぐに探し出すのは難しい事が多いです。そのため、モニタリングサイト1000では、調査に興味のある人や調査技術の向上を目指す人に向け、昨年からの講習会を実施し、識別・同定や調査手法に関する技術指導を行っています。ほ



講習会の様子

かにも実際の調査に参加する機会を作るなどして、モニタリング調査はどういうものかを経験してもらおうなどしています。残念ながら国内のシギ・チドリ類は減少傾向にあり、十分に観察できる場所も段々と少なくなっています。シギ・チドリ類を観察する機会が減ることで、観察者も減ることにならないように湿地生態系のモニタリングの指標としての重要性や、この魅力的な生物群を知ってもらうため、モニタリング調査自体の啓発に努めていく必要があると考えています。



9. サンゴ礁

サンゴ礁大規模白化現象、再び

一般財団法人 自然環境研究センター 木村 匡

2016年に奄美群島から八重山諸島にかけての広い海域において、夏季の高水温が主な原因と考えられる大規模なサンゴの白化現象が発生しました。モニタリングサイト1000でサンゴ調査を実施している24サイトの内、特に宮古島周辺と石垣島、石西礁湖及び西表島周辺では、調査地点の90%近いサンゴが白化し、50%以上が死亡するという大きな被害がみられました。

これらの被害が大きかった宮古島から西表島周辺地域でその後の状況を把握するため、2017年6月下旬から7月にかけて補足調査を行ったところ、30%程度のサンゴが白化していました。また、2016年は大きな被害の無かった沖縄島周辺や奄美大島周辺でも、7から8月には大規模な白化現象が観察されており、昨年度に引き続き今年度も高水温による被害が現れると思われます。



90%程度が白化しているサンゴ群集
(奄美大島・大浜海岸調査地点)

10. 海 鳥

冠鳥のオオミズナギドリ繁殖地に イノシシが上陸

公益財団法人 山階鳥類研究所 富田 直樹



オオミズナギドリの営巣地内で撮影されたイノシシ
(2016年8月19日撮影)

昨年、京都府舞鶴市の冠島においてオオミズナギドリを対象としてモニタリングサイト1000海鳥調査を行った際に、本種の営巣地内にセットした自動撮影カメラで一頭のイノシシが撮影されました(写真)。関係者一同愕然としました。無人島の冠島でこれまでイノシシの記録はなく、本州から泳ぎ着いたと考えられます。撮影されたのは8月中下旬で、地中で営巣中のオオミズナギドリにとっては、雑食で地中の動植物を探し出して食べるイノシシは脅威となります。しかし、幸いなことに、その後の山階鳥類研究所と地元の冠島調査研究会との共同調査などでイノシシの痕跡やオオミズナギドリの繁殖への影響は確認されていません。

冠島には、オオミズナギドリの脅威としてアオダイショウや移入種のドブネズミが生息します。今のところ、これらの影響の程度は不明ですが、少なくとも冠島のオオミズナギドリの巣穴数は減少傾向にあります。今回のような事態は、稀なことかもしれませんが、海鳥を含む島の生態系は、島外からの侵入者に対して非常に脆弱です。侵入者の監視や防除のため、今後もモニタリングサイト1000や地元団体による定期的なモニタリングは欠かせません。

●中米諸国の環境大臣らの生物多様性センター訪問



中央やや右手の白い帽子の男性がホンジュラス国 Jose Antonio Galdames 環境天然資源大臣
その左隣で国旗の台座を支える女性がエルサルバドル国 Lina Dolores Pohl 環境天然資源大臣

平成 29 年 9 月 20 日、中米エルサルバドル国とホンジュラス国の環境大臣を含む中米諸国の生物多様性に関する政府要人が生物多様性センターを訪問しました。

これは中米統合機構 SICA (Sistema Integral de Control Agroalimentario) と日本との生物多様性の保全プロジェクトの開始にあたり、SICA 加盟の 8 か国の関係者が、日本各地での取り組みを視察する一環で当センターを訪問したものです。

最初に、生物多様性センターの設立経緯や業務の概要、自然環境保全基礎調査などについて説明しました。その際には以下のような質疑応答がありました。

Q：植生調査の現地調査を行った 5 万もの地点はどのように選定したのか？

A：空中写真等で判読できなかった箇所を現地調査していった結果、5 万地点にのぼりました。

続けて標本収蔵庫を視察頂きました。その際には以下の質疑応答がありました。

Q：収蔵している動植物は日本在来種のみか？

A：普及啓発のために外来種も収蔵しています。

Q：収蔵庫の木製の壁や床、棚は虫害を受けやすいのでは？

A：温湿度や虫の侵入をチェックする等、日々の管理で対応しています。

これまで虫による被害は確認されていません。

最後に「これほどの調査を行い、あわせて標本を管理しているのは素晴らしい。これからもがんばって下さい。」と励ましの言葉を頂きました。



標本収蔵庫内の視察風景

●国際協力：東・東南アジアの国々へ向けた生物種の識別研修

生物多様性を保全するためには、まずは個々の生物種を正確に識別し、それらの種の特徴や生息状況等を理解することが重要です。このため、「分類学」の知識と能力を持つ人材が不可欠です。しかし、世界的にみても生物多様性が高い東・東南アジア地域では、このような人材の不足が課題となっています。

このため、2009 年に、ASEAN 諸国を中心に 14 の国などから構成される「東・東南アジア生物多様性情報イニシアティブ (ESABII)」を設立し、生物多様性センターが事務局を務め、分類学能力構築に向けた研修を開催しています。研修は現在までに計 17 回開催されており、若手研究者や行政官をはじめとする約 520 名が研修生として参加しています。研修生からは「取締りの最前線の税関職員にとって非常に有意義」「森林レンジャー訓練などで共有したい」など好評を博しており、研修後は、それぞれの母国で生物多様性の保全に貢献しています。

今後、研修を通じて ASEAN 諸国における分類学能力の更なる向上や若手研究者の育成等を推進していきたいと考えていますので、ASEAN 諸国における分類学のニーズや講師・研修生の候補などの情報をお持ちでしたら、生物多様性センターまでお寄せください。研修計画の立案や研修生選定などに活用させていただきます。詳しくは、以下のウェブサイトをご覧ください。

今後、研修を通じて ASEAN 諸国における分類学能力の更なる向上や若手研究者の育成等を推進していきたいと考えていますので、ASEAN 諸国における分類学のニーズや講師・研修生の候補などの情報をお持ちでしたら、生物多様性センターまでお寄せください。研修計画の立案や研修生選定などに活用させていただきます。詳しくは、以下のウェブサイトをご覧ください。



ワシントン条約附属書掲載種の識別研修の様子

■生物多様性センターの国際協力

http://www.biodic.go.jp/international_top/index-j.html



●インターネット自然研究所のご案内

生物多様性センターのウェブサイト「インターネット自然研究所」では、全国各地の国立公園の美しい風景や野生動物の姿などのライブ画像を配信しています。インターネット自然研究所は月平均で約350万のアクセスがある生物多様性センターホームページでも人気のあるコンテンツとなっています。

インターネット自然研究所から配信している画像は、全国各地に設置されたライブカメラによって日中の毎時0分頃に撮影されています。自然環境を撮影するカメラの特性上、過酷な自然環境に置かれているカメラも多く、設置場所によっては寒さや暑さ、海からの塩分、火山ガスなどの影響を受けています。耐候性のある機器構成になってはいますが、それでも維持管理は故障との戦いで、担当者は場所毎に違う自然環境の特性に日々悩まされながら管理を行っています。

各ライブカメラのページには、決定的瞬間を捉えた「ベストショット」があります。例えば、「ツシマヤマネコ（福岡市動物園）」では、ツシマヤマネコの何気ないしぐさがみられるほか、「白山ブナオ山の動物たち」では、ニホンカモシカ、ツキノワグマなどの動物をご覧いただけます。



物思いにふける(?) ツシマヤマネコ



花に戯れるツキノワグマ

●生物多様性センターの企画展示と今年度の自然体験プログラム

生物多様性センターでは、職員のアイデアが詰まった企画展示を開催中です。「富士五湖に鳥を見に行こう!」では、富士五湖でみられる水鳥たちの剥製を用いながら、水鳥の見分け方や生態をわかりやすく紹介しています。また、「絵本の中の生きものたち」では、「14ひきのひっこし」（いわむらかずお作）に登場するイタチをネズミの目線で覗いたり、「11ひきのねことあほうどり」（馬場のぼる作）に登場するアホウドリの剥製を展示するなど、絵本に描かれた生きものを実物と対比させて紹介しています。いずれも来年3月末までの開催となりますので、ぜひご覧ください。

また、毎年4月下旬から11月までの休日開館中は、身近な自然環境へ関心を持ってもらうために毎月1回、自然体験プログラムを開催しています。今年度は計6回のプログラムを開催し、390名の方にご参加いただきました。特に人気のあった自然体験プログラムは、9月に行ったコウモリ観察会です。動物写真家の中川雄三さんを講師にお迎えし、小学生から大人まで約50名の方にご参加いただきました。参加者の中には初めてコウモリが飛ぶ姿を観察した方も多く、このプログラムを通じて、コウモリが身近に感じられるようになった様子でした。観察後は、講師の中川さんが、「ライオンやパンダのように広く知られている生き物ではなく、あまり知られていないけれどもおもしろい生態を持ったコウモリなどを広く知ってもらうために動物写真家になった」というお話に参加者のみなさんは真剣に耳を傾けていました。今年度の自然体験プログラムは終了しましたが、今後も、どなたでもご参加いただける楽しい自然体験プログラムを行っていきたいと思います。



企画展示の様子



9月の自然体験プログラムの様子

生物多様性センターに収蔵している標本紹介 第27回

生物多様性センターでは、『日本の生物多様性を後世に伝える』『日本の自然的重要地域の生物相を顕す』『生物多様性の理解を深める』という3つの観点から、日本全国に分布している様々な生物の標本を収集しており、現在は約65,000点以上の標本が収蔵されています。これらの標本は普段は非公開ですが、このコーナーではその一部をご紹介します。



標本紹介 シオマネキ

Uca arcuate

分類：エビ目 スナガニ科

環境省レッドリストカテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

シオマネキの乾燥標本（生物多様性センター所蔵）

こんなカニを国内でもみられることをご存じですか？実は意外と身近に生きています。



◎大きなはさみはオスのシンボル

国内では伊豆半島以西の太平洋沿岸、四国、九州及び南西諸島に広く分布しており、川と海の接点に位置する干潟に巣穴を掘って暮らしています。オスの左右どちらか片方のハサミは巨大化することが知られており、オス同士の闘争や縄張りの主張、メスへの求愛行動に使用されます。もう片方の小さなハサミは主にエサを食べる際に使用し、干潟表面の有機物を器用に摂食しています。

繁殖期になるとオスは大きい方のハサミを上下に動かしてメスにアピールを行い、手招きするようなその様子から「シオマネキ」の和名がつけられました。英名では「Fiddler crab（バイオリン奏者のカニ）」と呼ばれています。



シオマネキ (撮影：上野 淳一)

◎逃げ足速いゼマツハウオーク！

時速7km以上で走る同じスナガニ科のスナガニやツノメガニにはかきませんが、本種の足の速さもカニ類ではトップクラスで、天敵のサギ類やチドリ類が現れると、巣穴にダッシュで逃げ込みます。ちなみに、どれだけ早くても地に足がついているので、あくまで“早歩き”。ヒトの歩く速度が時速4～5kmなので、小さい体のわりにすごいスピードで歩いていることになりませぬ。

◎住む場所が減って困っている

本種の生息地である干潟は開発の手が入りやすいため、都市沿域を中心に、これまで多くの干潟が埋め立てや浚渫(しゅんせつ)により失われてきました。また、河川改修や水閘門(すいこうもん)の改築等により本種が生息する周辺水域の底質環境が変化し、著しい個体数変動が確認されている地域や、環境改変による潮流の変化で干潟が浸食され、個体群が減少している地域もあります。

近年は、各地で、動植物にも配慮した親水空間の創出が図られていますが、本種は他のカニ類に比べて人目に付きやすく見た目にもユニークであることから、人による乱獲も懸念されています。

●参考文献

- ・「ガタバトル」～愛の戦士ムツゴロウ vs 甲殻の騎士シオマネキ～ 佐賀市シティプロモーションムービー <https://www.city.saga.lg.jp/main/25007.html> (平成29年10月30日現在)
- ・脚の速いカニ。2012. Science Window. 夏号, p.39.
- ・日本ベントス学会編。2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック. 東海大学出版会
- ・三重県農林水産部みどり共生推進課。2015. 三重県レッドデータブック 2015 ～三重県の絶滅のおそれのある野生生物～ p.385-396

～新任職員紹介～

齋藤 佑介（専門調査官）



本年7月より生物多様性センターで自然環境保全基礎調査などを担当しています。これまでは、生物多様性センターが提供するデータを使う側でしたが、今度は提供する立場となり、データ収集・提供の意義や大変さが分かってきました。ぜひ、本ニュースレターの1頁でも紹介されている自然環境調査 Web-GIS をご活用ください！

近藤 千尋（生態系監視科）



本年4月より生態系監視科に配属になりました。前任地は那覇で、野生生物や世界遺産関連業務を担当していました。こちらでは2頁で紹介している浅海域生態系現況把握調査や、国立公園におけるインベントリ整備業務を主に担当しています。今年で入省3年目の未熟者ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

大嶽 若緒（調査科）



今年度新採用の大嶽です。鳥が好きです。見て、聞いて、嗅いで、触れて…物心ついた頃から、鳥は、いつでも最も気になる存在であり、最大の支えであり、動機です。いつからか一羽でも多くの鳥を救いたいと思うようになって、ふと気付けばここにいます。そして、頑張らんとはいかんなあ、と思いつつ焼き鳥を食べたりもするのです。



●展示室紹介 つながりうむ

生物多様性センターでは、生物多様性についての展示室を設けています。展示室は生物多様性のつながりを表現しているため“つながりうむ”と名前がついています。展示室にある扉を開くと、いろいろな動物たちが、生きもの同士のつながりや生物多様性について解説してくれます。

映像シアターでは、日本の自然環境や生物多様性の大切さについての映像をみることができます。レッドデータブックや生物多様性基本法など、生物多様性を守るための様々な仕組みや取り組みをパネルで紹介しています。また、小さいお子様でも楽しんでいただけるように、生物多様性レンジャークイズなどゲームを通して学ぶこともできます。



利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時
 - 休館日 冬季期間（12月～4月上旬）の土日祝日
年末年始（12月29日～1月3日）
 - 入館料 無料
- ※団体でご利用される場合は事前にご連絡をお願いします。

交通案内

- 富士急行線・中央高速バスで河口湖駅または富士急ハイランド駅下車、タクシーで約10分
- 中央自動車道路河口湖ICまたは東富士五湖道路富士吉田ICより車で約15分



環境省 自然環境局

生物多様性センター Biodiversity Center of Japan

〒403-0005 山梨県富士吉田上吉田剣丸尾 5597-1
ウェブサイト URL <http://www.biodic.go.jp/>
TEL : 0555-72-6031 (代表) FAX : 0555-72-6032

